

報告要旨

報告1 ロックの人格同一性論の批判的検討

報告者 : 今村 健一郎 (関東学院大学他・非常勤講師)

コメンテーター : 加地 大介 (埼玉大学)

「周知のように、ロックは、人格同一性を意識の同一性に基づける立場（以下、「意識説」と呼ぶ）をとっている。本発表の関心は、ロックの意識説における「意識」とは何かという問題よりも、むしろ、ロックは人格同一性論において自らの意識説を貫き通すことができるのかという点にある。意識説のテーゼは、正確には、人格同一性は意識の同一性にのみ存するというものであり、このテーゼを打ち出すことによってロックが否定したいのは、人格同一性の成立を（物質的実体であれ、非物質的実体であれ）実体の同一性に基づける立場である。しかし、ロック自身が意識説の立場を一貫して維持しているかどうか疑問である。というのも、意識説は忘却や記憶の錯誤に関わる事例をわれわれの通念に即した仕方では処理できず、そして、ロック自身もこの点に気付いているように思われるからである。また、ロックは、われわれの通常の言葉遣いにおいて、人格同一性と人間同一性は意義を同じくするというのを認めている。このことも、意識説が維持しがたい立場であるということを示唆しているように思われる。

本報告は、以上のような疑義を提起した上で、ロックの意識説に対する批判的な検討を行う。もし意識説が維持しえない立場だとするならば、ロックは人格同一性の基準を実体の同一性に求めざるをえないだろう。本報告では、さしあたって、この点を見極めることを第一の目標とするものである。

報告2 ホッブズ神学の「合理的」骨格としての神崇敬の自然法の検討

報告者 : 木島 泰三 (法政大学 非常勤講師)

コメンテーター : 佐藤 正志 (早稲田大学)

本発表は『リヴァイアサン』第31章に登場する「神崇敬の自然法」と呼ぶ規則が同書の論証構造の中で果たす役割を検討する。第一に、「神崇敬の自然法」がホッブズのラディカルな唯物論の内部で、超自然的存在者をめぐる言説に理解可能な位置づけを与える試みであることを指摘する。中心となる着想は、神学的言語における見かけ上の記述的言語が、実際には「崇敬（尊敬）の意志の表明」とあるという反記述主義的分析である。第二に、「神崇敬の自然法」を同書第12章「宗教について」で示される「見えざる行為者への恐怖」に基礎を置く合理的規則と位置付け、「暴力死の恐怖」に基礎を置くいわゆる自然法との平行関係を明らかにする。第三に、「見えざる行為者への恐怖」に基礎を置く情念的神理解と、「好奇心」に由来する理性的神理解の関係を明確にし、ホッブズの不可知論的神理解、及びそれに依拠する規約主義的教義論と、理性的神理解との境界面を明らかにする。最後に、以上の考察から、同書第3-4部の神学的議論の「合理的」骨格を明らかにする。